

# 中国建国初期の小中学校における 思想政治教育

## —トレーニングとしての愛国主義教育—

鄭 成

### 概 要

本論文は、中華人民共和国建国初期の小中学校を中心に愛国主義教育の実施状況を考察した。朝鮮戦争を機に発足した愛国主義教育は国民の動員において大きな成功を収めた。その理由は二つがある。一つは、悠久の歴史、伝統文化と屈辱な近代を中心とした歴史的資源が、国との一体感と誇りを喚起させる材料として大いに活用されたことである。もう一つは、一連の手法が使われ、トレーニングを行うように愛国主義の理念を生徒の心底に植え付けていたことである。この教育手法はさらに成功経験として教育専門誌、新聞記事、会議などを通じて、一層普及された。この時期の愛国主義教育を経て動員された自国への国民感情は強い排他性をもつものとなった。本論文は、愛国主義教育を担当する教師らの現場報告をもとに、当時の愛国主義教育でいかなる教育手法が活用されたのかについて考察を行い、その特徴を分析してみた。

### キーワード

愛国主義教育、教育の現場、実施状況、トレーニング、同調の圧力

### はじめに

本研究は建国初期の愛国主義教育について、当時の教育者らがどのように愛国主義理念を生徒に伝えたかを手がかりにその実態を考察し、その特徴を把握することを目的とする。

愛国主義教育は現代中国における国家と国民の相互関係を考察する重要なテーマとして多くの研究関心を集めている。建国当初からなされている中国の愛国主義教育だが、より細かく分けると、政策の意図、実施方法、受容効果など複数の側面がある。関連の先行研究は、特に日本の場合、中国政府がなぜ、そしてどのように愛国主義教育を展開したのか、という政策意図の側面に集中する傾向がある。このような研究動向は言うまでもな

く、1990年代以降に中国で展開された愛国主義教育キャンペーンが日本を批判対象とし、日中関係に多くの不安要素を与えたことと関係が深い<sup>1</sup>。上記の先行研究を通じて、中国の愛国主義教育は中国共産党が自らの正当性を維持する手段であるとの認識が深まるとともに、1990年代以来、国際情勢と国内政治の相互作用下、中国政府がいかに関国主義教育を展開したのかについても、多くのことが解明された。

一方、実施方法に関して、これまでの関連研究にて全容解明には至っていない。在米中国人研究者の汪錚は著書で1990年代以降の愛国主義教育キャンペーンの実施方法について、一章の紙幅を割いて紹介している。それによると、人々は、中国政府が一〇〇の愛国主義教育基地、「三つの一〇〇」愛国主義教育プロジェクト（一〇〇の映画、一〇〇の本、一〇〇の歌）を通じて愛国主義教育を勢いよく展開していることが分かる<sup>2</sup>。しかし、汪錚は巨視的視点から考察を行っているため、教育の現場において、愛国主義教育が唱える政治的理念や推奨する価値観がどのように一人一人の内面に入り、その意識構造の一部になったのかについては、依然として不明なところが多数残る。

愛国主義教育を複数の工程をもつプロジェクトだとイメージするならば、上記の一〇〇の愛国主義基地などはその中間にある工程であり、その最後の仕上げは、本論文が考察する、教育の現場で行われる愛国主義教育の実践となる。この段階の愛国主義教育の実践は、その効果を決める重要なプロセスとなる。

本論文は、朝鮮戦争勃発直後の愛国主義教育に焦点をあてる。この時期は、中華人民共和国建国後の同教育の嚆矢であり、その後長きに亘り応用される愛国主義教育の手法の原型をここに確認することができる。朝鮮戦争後、中国政府は愛国主義教育を通じて、国民意志を統合し、民意を調達する点において大きな成功を収めた<sup>3</sup>。しかし、当時の愛国主

- 
- 1 政策面から愛国主義教育を考察する日本の先行研究は以下のものが挙げられる。木下恵二「中国の愛国主義教育」家近亮子・松田康博・段瑞聡編著『岐路に立つ日中関係—過去との対話・未来への模索』晃洋書房、2007年、pp.109-130。江藤名保子『中国ナショナリズムの中の日本—「愛国主義」の変容と歴史認識問題』勁草書房、2014年。また、歴史教育のあり方を考察する王雪萍の研究もある。王雪萍「中国の歴史教育における愛国主義教育の変遷—建国後の「教学大綱」の変化を中心に—」『現代中国研究』第29号、2011年。
  - 2 Zheng Wang, "Never Forget National Humiliation: Historical Memory in Chinese Politics and Foreign Relations," Columbia University Press, 2012. 同書は日本語版がある。汪錚『中国の歴史認識はどう作られたのか』東洋経済新報社、2014年。1990年代以降の全国における愛国主義教育の展開について、同書の第4章「勝者から敗者へ—愛国主義教育キャンペーン」が紹介している。
  - 3 文学研究者、元北京大学教授の銭理群によれば、朝鮮戦争が起きた後、彼自身を含む同世代の若者の多くは、「近代になって中国に侵略してきた帝国主義であり、現実の世界構造の中で中国を封鎖し拒絶している覇権主義であり、社会制度とイデオロギーの面で社会主義と対立関係にあると言うのが我々の理解している西洋なわけだから、おのずとアメリカを敵とみなすようになってしまう」（銭理群著、阿部幹雄ほか訳『毛沢東と中国—ある知識人による中華人民共和国史』青土社、2012年、p.55）。銭らの若者がまったく接点もなければ、自分自身が被害も受けていないアメリカを敵と見なしたのは、やはり朝鮮戦争に伴い展開された愛国主義教育が絶大な効果を発揮したことが考えられる。

義教育に伝えられる英雄物語を読むと、なぜこのような時代錯誤的なものがここまで民意を調達できたのか疑問に感じる人が多くいるだろう。当時の愛国主義教育は果たしてどのように展開されていたのだろうか。

本論文はこのような問いを念頭に愛国主義教育の現場の実態を明らかにすることを目標とする。筆者は以前1956年に実施された上海鉄道局主催の少年夏令营を取り上げて、1950年代半ば頃の愛国主義教育の実態を考察したことがある。そのケーススタディを通じて、経済レベルが向上した1950年代半ば頃、都会部の教育当局がソ連のやり方を愛国主義教育に導入し、生徒の積極性を引き出すよう経済的インセンティブを活用したことを明らかにしている<sup>4</sup>。

本論文は考察時期を1956年から朝鮮戦争直後に繰り上げるとともに、考察の対象を各地の小中学校における愛国主義教育とする。考察にあたっては、教育部発行の『人民教育』や各地の教育当局発行の『天津教育』、『新教育』など教育関係の専門雑誌を利用する。これらの教育誌は、小中学校教育に従事する人間を主な読者とする。誌面には大物の教育家が執筆する文章のほか、小中学校の教員が執筆したものも多い。小中学校の教員が執筆した文章は、教員同士の経験交流の一環として、各自の教育経験をまとめて、アピールする性格のものが多く見られる。これらの文章を通じて、愛国主義教育の展開にあたって、教員らがどのように活動を行っていたのか、こうした活動がいかなる展開を経て、最終的にどのような効果を得られたかなどについて多くの情報を得ることができる。

上記の雑誌以外に、愛国主義教育をテーマとした各種の論文集も利用する。これらの論文集は、模範的教員による優れた経験を普及させるために、上記の教育関係の専門雑誌から模範的文章を厳選した上で、再編集したものである。こうした論文集の掲載文を通じて、教育現場の状況をより集約的に把握することが可能となるだろう。

## I 建国初期愛国主義教育の起源

### (1) 朝鮮戦争を機に始まった愛国主義教育

周知のように、中華人民共和国建国後、愛国主義教育は政治思想教育の主な内容の一つとなった。しかし、それは建国直後に提起されたものではない。1949年12月30日の「第一次全国教育工作会議」で、当時教育部副部長であった銭俊瑞は、学生や生徒を対象とし

4 鄭成「中国の愛国主義教育の有効性への歴史的考察—1956年の上海鉄道局主催の夏令营を手がかりに—」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』37号、2019年11月。

た思想政治教育の意義を論じる際、「段階的に革命的人生観を作りあげることにある」との論述に留まっていた。この時点では愛国主義教育はまだ主役になっていなかった<sup>5</sup>。

新中国の政治宣伝における愛国主義教育の本格的な登場は、1950年10月の朝鮮戦争参戦が大きな契機となった。突如降りかかったこの戦争に対し、多くの中国人が強い懸念を抱き、内心に反対または抵抗の気持ちを抱く人も少なくなかった。その頃の中国人は長い戦争期間をようやく生き抜いて、安定した生活を切実に願っていた。超大国米国を敵に回すことは、多くの人々から見れば身の程を知らない行為であり、非常に憂慮すべき事態であった<sup>6</sup>。

このような「反対」や「日和見」の心情をなくし、民衆が参戦支持にまわるよう、中国共産党政権は国民の思想政治教育の強化に力を入れ、愛国主義教育を大々的に展開しはじめた。

当時の愛国主義教育はどんな論理をもって発足したのか。人民日報の1951年元旦付の社説は多くのことを教えてくれる。同社説は、中国の朝鮮戦争参戦の理由と意義について、国共内戦以降、米国は国民党の台湾占領に加担し、中国沿海部を侵略することだけで満足できず、朝鮮半島を足場にして中国を侵略しようとしているとの論調を展開する。このような論調は、中国が平和を望まないわけではないが、米国が中国の平和と復興建設を邪魔するため、中国は自衛のために戦うという中国政府の主張を力強く支えている。

社説は続けて次のように展開する。中国は世界最大の国家の一つであり、世界人口の四分の一を占めており、歴史上の数千年間は世界文化の先進者であったが、ここ百年近くの間だけヨーロッパ人に遅れてしまい、資本主義と帝国主義国家の残虐非道な圧迫に遭った。このような論述は、中国の不幸はすべて外来民族の侵略といじめに起因することを仄めかす。またこのような論理は、中国と外部世界が従来から対立関係にあったという認識の枠組みを強化させた。同社説の核心は、米国の侵略戦争に対して、中国人はふるって抵抗せねばならぬということであり、この点は愛国主義教育の基本論調となった。ちなみに、同社説には、自尊自大に反対するという言及もあったが、重要な論点としては扱われなかった。

この社説に先だって、中国の教育界は既に動き始めていた。中国が参戦した1950年10月に、雑誌『人民教育』は「抗米援朝を展開せよ」という社説を出した<sup>7</sup>。同社説は米国

5 銭俊瑞「在第一次全国教育工作会議上的総結報告要点（日本語訳：第一回全国教育工作会議での総括報告要点）（1949年12月30日）」中共中央文献研究室編『建国以来重要文献選編1』中央文献出版社、2011年、p.91.

6 朝鮮戦争をめぐる、反対と賛成を含む中国民衆の多様な考えと気持ちについて、陳肇斌による詳細な考察がある。陳肇斌『中国市民の朝鮮戦争——海外派兵をめぐる諸問題』岩波書店、2020年。

7 「開展抗米援朝（日本語訳：抗米援朝を展開せよ）『人民教育』第2巻第1期、1950年10月。

を猛批判した上、次のように米国の影響を徹底的に中国社会から排除することを国民に要請していた。

「中学以上の学校は、米帝国主義が今まで中国で散布していたあらゆる毒に満ちた思想的影響を徹底的に暴露し、批判しなければならない。あらゆる米国に対する幻想、国民党の欺瞞、恐米病、所謂米国式「民主」、米国の生活スタイル、米国科学や文化の強さなどを含むその本性を暴き、米国に対するあらゆる誤った見方を肅清し、我々青年の思想を正さねばならない。米帝国主義は中国人民を脅しており、世界人民にとって最も卑劣で最も残虐で最も反動的な敵であり、張り子の虎であり、中国人民の格下であり、我々の相手ではないことを青年に認識させ、そして米国に対する蔑視と最大の憎悪を植え付け、世界平和を守り、人民の祖国を守るために戦い抜くように、青年の決意を固めさせなければならない。」<sup>8</sup>

「最も卑劣」、「最も残虐」、「最も反動的」という、この社説で使われた三つの「最も」は、当時の最も強硬な宣伝戦であると言えよう。「米国に対する蔑視と最大の憎悪を植え付け」ることは、愛国主義教育の目標の一つとなっていた。

社説は、思想教育の具体的措置について、思想政治教育の教育綱領の作成、書籍、新聞、書類を参考資料として生徒に提供すること、そして座談会、講演会、政治報告会、写真展示会などを提示した<sup>9</sup>。

社説の公表後、北京各地で大規模な宣伝教育活動が展開された。これを受けて教育当局は愛国主義教育を政治思想工作として、日常の学習生活と一体化させることを提起した。翌11月刊行の『人民教育』の社説は、政治思想教育は時事宣伝に留まるのではなく、「計画的に、系統的に全面的な政治思想教育を展開しなければならない」と指示している<sup>10</sup>。同社説はさらに「米帝国主義の思想と影響が未だに影響力を持っている」と警鐘を鳴らしながら、「我々の思想政治教育は、現在の抗米援朝・祖国護衛の任務と一体化し、具体的な闘争や生活と一体化し、この億万人が関わる偉大な現実闘争の中で愛国主義と国際主義の教育を展開する」との指示を出している。<sup>11</sup>

中国が朝鮮戦争に参戦した後、中国社会の雰囲気と世論環境は大きく変わった。この変化を読み取った中国共産党は思想政治教育を強化する必要性を認識した。この時期、思想政治教育はその目的と内容が徐々に広がり、民衆が国家対外政策を完全に擁護するように

8 「開展抗米援朝（日本語訳：抗米援朝を展開せよ）」、前掲誌、p.9.

9 「開展抗米援朝（日本語訳：抗米援朝を展開せよ）」、前掲誌、p.10.

10 「繼續開展与深入学校教育中抗美援朝的思想政治教育（日本語訳：学校教育における抗米援朝の思想政治教育を繼續して展開し、推進せよ）」『人民教育』第2巻第2期、1950年11月、p.5.

11 「繼續開展与深入学校教育中抗美援朝的思想政治教育（日本語訳：学校教育における抗米援朝の思想政治教育を繼續して展開し、推進せよ）」、前掲誌、p.6.

することをミッションリストに入れた。

## (2) 愛国主義の定義

現代中国では、「愛国主義」という用語は「祖国を愛す」ことを含む、複数の意味合いを持つ。以下では、建国初期の愛国主義が何を意味していたかを、当時のテキストを手掛かりに考察してみる。

「愛国主義」が言及された最初の場合は、1949年9月に制定された「中国人民政治協商会議共同綱領」である。共同綱領の第42条に「五つの愛」がある。すなわち「祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、公共財産を愛する」というものである。これは1950年代の五愛教育の核心内容となっている。この段階では、「祖国を愛する」ことは提起したものの、「祖国」とは何の実体を指すかが不明確であった。建国後一年未満の間、愛国主義という用語は有名無実の状態であった。中国の歴史教育を研究する王雪萍によると、1950年8月に公布された「小学校歴史課程暫定標準」では、「歴史の教育の目標として愛国主義の涵養を提起したが、愛国主義の具体的な意味は説明されなかった」という<sup>12</sup>。

朝鮮戦争勃発後、状況は大きく変わった。愛国主義は一躍して時代のキーワードとなった。愛国主義教育の急展開に伴い、愛国主義の中身と目標を論究する文章が多く現れた。以下はこれらの論文を通して、当時の教育界が如何に愛国主義を捉えていたかを考察したい。

1951年5月に刊行された「愛国主義教育論」と題する論文で、中国共産党宣伝幹部である方克は、「愛国主義とは、人々が自分の祖国を愛する思想と感情である。この思想と感情の養成は自然な成り行きである。人間は、幼少期から自分の生まれた土地や最も親しい人間に愛着を持っている。年を取るにつれ、視野も広がり、郷土を愛し、同胞を愛し、そして祖国を愛する意識が目覚めていく。古往今来の世界各民族の歴史を見渡せば、自国の土地、山河、景色、人物、英雄の業績を讃える文学、芸術記録、言い伝え、民話、伝説、神話などがどこにでもある。いずれも愛国主義の現れと考えるとよい」と述べている<sup>13</sup>。

12 王雪萍「中国の歴史教育における愛国主義教育の変遷—建国後の「教学大綱」の変化を中心に—」『現代中国研究』第29号、2011年、p.54。

13 方克「愛国主義的意義（日本語訳：愛国主義の意義）」教育資料叢刊社編『学校中的愛国主義教育（日本語訳：学校のなかの愛国主義教育）』改訂版、人民教育出版社、1952年12月、p.1。（転載元、方克「論愛国主義教育（日本語訳：愛国主義教育論）」『湖南教師』第3巻第2期、1951年5月）。著者の方克（1918-2009）は中国共産党員、宣伝畑の古参幹部。建国後、1950年代を通じて湖南人民革命大学教務処長、副教育長、湖南省行政学院副院長、湖南省宣伝部副部長などを歴任。

方克の定義によると、愛国主義はまず一種の普遍的で素朴な感情であり、つまり一人一人が自国を愛する感情である。この上、愛国主義は階級性を有するものであり、目下の中国の愛国主義には旧愛国主義と新愛国主義の二種類があるという。方克はさらに、新愛国主義は人民民主専制を確固たるものにし、人民祖国を護り、人民祖国を建設し、そして社会主義の未来を切り拓くことを目的とする、現在の抗米援朝、保家衛国も新愛国主義の一部となる、との論点を展開する。方克は一番目の意義を肯定しつつ、二番目の意義を愛国主義の核心と据えた。ここでは愛国主義は中国共産党の政治目標を内包し、群衆を動員するための便利なスローガンとなっている。

一方、歴史学者の郭繩武は、愛国主義教育の目的について四点を挙げている。第一に、祖国と人民に対し献身する責任感を養うこと。第二に、祖国と人民に対し偉大な誇りを養うこと。第三に、敵に対する不倶戴天の敵愾心を養うこと、である。第四に、実践の精神を高め、革命の気魄と真実を求める精神を一体化させること。また一点目について、祖国に対し貢献すべきことを、常に念頭に置くべきであると郭は補足説明している。例えば、人々は祖国を守り、祖国を建設する責任を担い、祖国の安全に危害を与える敵と闘争する責任を担い、学校や職場でも祖国に対しどのように貢献できるかを常に念頭に置くべきである、と述べている。したがって、この段階の愛国主義教育の主な目的は国家政権に対する忠誠心と責任感を養うことであることがここから明らかである。三点目に強調された敵に対する不倶戴天の敵愾心にも、時代の烙印が鮮明に窺える<sup>14</sup>。

このように愛国主義という概念は、朝鮮戦争を機に急速に明確化し、かつ複数の目的を持つようになった。一方、現場の教師らは一つの共通する問題に立ち向かうことになる。それは、新しい愛国主義に付与された多くの抽象的な理念を如何に若い生徒たちに理解させ、受け入れてもらうか、である。既成のマニュアルを持たない教員らは、各自に模索を続けていた。この模索段階で編み出された愛国主義教育の手法は、そのあとの時代にその姿を見ることができると述べている。以下の節では、現場教員の報告を手掛かりに当時の愛国主義教育の実施状況を考察していきたい。

14 郭繩武「愛国主義教育の任務、目的と原則（日本語訳：愛国主義教育の任務、目的と原則）」教育資料叢刊社編、前掲書、p.12。（転載元、郭繩武「愛国主義と愛国主義教育（日本語訳：愛国主義と愛国主義教育）」『西北教育通信』第6巻第5期、1951年6月）。著者の郭繩武は歴史学者。1935年に北京師範大学国文学部卒業。1938年に中国共産党入党。1949年後、西北軍政委員会教育部処長、西北大学教授、歴史学部長、副教務長、副校長を歴任。

## II 愛国主義教育の実態

### (1) 全面的な愛国主義教育

朝鮮戦争勃発後、愛国主義教育は大規模な群衆運動の形でしばらく行われた後、小中学校の正規教育の一部として展開されるようになった。一時は政治、国語、歴史、地理、音楽だけでなく、数学、化学など理系の科目にも愛国主義教育の姿が見られた。こうした動きは、日常の正規教育と結合させよという当局の要請に応じたものである。

この時期の愛国主義教育は二つの内容がある。一つは中国の歴史的、文化的、地理的優位性を宣伝することを通じて、生徒の自国への誇りと愛国心を培うこと。もう一つは時事教育を折々取り入れて、朝鮮戦争の対戦相手であったアメリカを非難すること、である。両者の根底にあるのは、マルクス主義的歴史観の浸透と、中国共産党の権威性の強化をはかる意図である。

このような愛国主義教育に対して、政治や国語、歴史、地理などの科目は高い親和性を持つが、数学、化学など理系の科目は本来ならそう簡単にいかないはずであった。しかし実際には、教員の現場報告によると、愛国主義教育は政治、歴史などの科目では無論のこと、数学などの理系科目でも多彩な展開を見せていたことが分かる。以下はまず各科目における愛国教育の指導方針を確認する。

まず政治科目に関しては、朝鮮戦争をめぐる反米の時事教育がその中心的な内容となった。1950年12月、中央教育部初等教育司副司長の方興巖が天津の小学校教師に向けて、政治思想教育の方針について次のように語っている。「(米国は)我々の最大の敵であり」、反米のために「児童たちに体育と衛生の観念を指導し、健康な体を養成させ、将来国防の建設と米帝への対抗に参加できるようにさせるべきだ。目下の時局と無関係な教科書の内容を適宜圧縮して、新聞や雑誌から抗米援朝、保家衛国の生きた材料を集め、サブテキストを作成し、授業に応用するべきだ」<sup>15</sup>。つまり、反米の時事教育を最優先せよということであった。

それ以外の科目における愛国主義教育について、雑誌『新教育』に掲載された「愛国主義教育について」と題する一文は、指導的意見を出している。論文は、歴史科目につい

15 「小学的施教目標与時事的政治思想教育—中央教育部初教司方興巖副司長对天津小学校教師的報告（日本語訳：小学校の教育実施目標と時事における政治思想教育—中央教育部初等教育司方興巖副司長による天津市小学校教員への報告）」西北軍政委員会教育部編『怎樣实施愛国主義教育（日本語訳：いかに愛国主義教育を実施するか）』西北人民出版社，1951年4月，p.219。（転載元『天津教育』第8号）

て、「愛国主義教育を行うための基本科目であり、政治科目よりもっと大きな役割を果たすべきだ。歴史を教えることは政治を教えることであり、政治は即ち階級闘争であり、歴史とは階級闘争の記録である」と述べた上、その役割は中国共産党政権の合法性を主張することにあるとの見解を示した<sup>16</sup>。

中国共産党政権の合法性を強調するための歴史叙述は、同時期の別の論文で提示されている。つまり、中国はかつて高度な科学技術と文化を誇る国であったが、近代以降は後進国になった。その原因は長い封建的社会制度と百年近くの半封建的半植民地的社会制度によって科学技術の発展を束縛されたためである<sup>17</sup>。このような歴史叙述は、今日の中国においてかなりなじみのあるものとなっている。

歴史科目のもう一つの目的は、生徒のなかに自国の誇りを育てることである。これに関して、「歴史教育を通じて愛国主義教育を進める」一文は、「中華民族の歴史は確かに偉大であり、豊富であり、愛すべきである。我々は生徒たちに偉大なる過去に対して、民族的誇りと自尊心を満ち溢れるほど持たせなければならない。生徒たちに、中華民族の一人として生まれたことはいかに光栄であるかを感じ取らせなければならない」と述べながら、中国古代の輝かしい文明の宣伝にも力を入れるように呼びかけている<sup>18</sup>。

地理科目も愛国主義教育を展開する上での重点科目である。先述の『新教育』掲載の「愛国主義教育について」は、「地理教育の中で、中国の土地と物産、中国人民の生活の価値、過去及び未来に対して、熱烈な感情を育てるべきだ。中国は物産豊かで、どの土地も素晴らしいという感情を生徒に持たせるべきだ」と述べている<sup>19</sup>。このように、中国の広大な土地と豊かな物産を宣伝することによって生徒の愛国心を促すことは、地理担当の教師に共通する姿勢である。ある教師は東北の地理を教えるとき、次のように生徒に紹介していた。「東北の鉄道の長さは約 13000 キロに達している。我々が一番速い蒸気機関車に乗って、止まることなく走り続けても、9日9晩をかけてようやく東北の全ての鉄道を走りきれるのだ。東北の大豆、高粱、小麦はとても豊富で、とくに大豆の産出量は世界一だ」<sup>20</sup>。

16 「愛国主義教育進行的方式和方法（日本語訳：愛国主義教育の方式と方法）」教育資料叢刊社編、前掲書、p. 18。（転載元、胡易「関于愛国主義教育（日本語訳：愛国主義教育について）」『新教育』（上海）第3巻第3期、1951年5月）。

17 林幹「怎樣通過歴史課培養民族自尊心与自信心（日本語訳：歴史科目を通じていかに民族自尊心と自信を培うか）」呉鋒ほか訳著『愛国主義教育的教学經驗（日本語訳：愛国主義教育の教育經驗）』学習書店、1951年4月、p. 57。）

18 徐自明「在歴史教学中進行愛国主義教育（日本語訳：歴史教育を通じて愛国主義教育を進める）」『愛国主義教育』文教出版社（河南）、1951年4月、p. 131。（転載元『教学研究』第4巻第2期、第3期）

19 教育資料叢刊社編、前掲書、p. 19。

20 哲民「我怎樣在教東北地理時貫徹愛国主義的思想教育（日本語訳：私は東北地理を教える際にいかに愛国主義的思想教育を貫いたのか）」呉鋒ほか訳著『愛国主義教育的教学經驗（日本語訳：愛国主義教育の教育經驗）』学習書店、1951年4月、p. 51。）

このような紹介を聞いて、生徒たちは自国の地理が絶対的優勢を持つとの認識を持つようになる。一方、中国の地理地形や自然資源の弱点は、こうした宣伝には一切見られない。

国語について、引き続き「愛国主義教育について」は次のように規定している。「(生徒は)文学作品を通じて、過去と現在の祖国人民の生活と運命に対し強烈な感情を生み出すことができる。労働人民の生活の苦痛に同情し、彼らの卓越した忍耐力と偉大な奮闘精神を尊敬するようになる。(中略)優美な風景を描いた作品を読めば、祖国の美しさと偉大さを感じ取ることができる。」<sup>21</sup>。ここから窺えるのは、国語科目の二つの目標である。一つは、生徒が自国に対する素朴な愛情を育てること。もう一つは、中国共産党が唱える労働大衆を中心とした階級観を生徒たちに涵養してもらうことである。

上記の目標を目指して、国語の授業では、「フォード工場の競争」といったテキストを使って社会主義社会の優越性を唱える教師もいれば、「新しい国家」や「建国の大典」、「十八勇士」「平型関の戦い」などのテキストを使って、「新中国の設立は毛主席の英明な指導と人民解放軍の勇敢な奮闘の賜り物だということを児童たちに知らせる」教師もいた。愛国主義教育を展開し、子供たちのなかに中国共産党の政権に対する信頼と熱愛を育てる上で、国語科目は豊富な材料を持っていたのである。

以上の科目における愛国主義教育の展開はある意味予想が付きやすい。一方、数学、化学などの理系科目の展開は異様な様相を見せている。

数学科目では、時事教育を授業内容に取り入れようと、数学の論理について次のような説明を行う教員がいた。

「ある事件が起こる蓋然性は1だという場合を説明するとき、我々は次のような事例を挙げた。5月30日、政府は205名の反革命分子を処刑した。もしその205名から任意に一人を取り出したら、彼が反革命分子である蓋然性は1である」。

このような教え方について、担当教師は「いささかも無理を感じていない。ある事件が必然的に起こる時の蓋然性は1だという数学問題を説明できた上、政府が反革命事件を取り締まる正しい精神も伝えられた。反革命を鎮圧するための良い教育となった」と総括する<sup>22</sup>。

小学校の練習問題には次のような問いが設定された。

「1. 平和的民主的陣営の人口は、中国に約5億人、ソビエトに約2億人、東欧と朝鮮、ベトナムなど人民民主国家には約1億人いる。全部でどれくらいの人口となるだろうか。

21 教育資料叢刊社編、前掲書、p.20.

22 余元慶、余元希「在数学教学中貫徹愛国主義教育的經驗（日本語訳：数学教育を通じて愛国主義教育を実践する経験）」教育資料叢刊社編、前掲書、p.49。（転載元『新教育』（上海）第3巻第5号、1951年7月）

2. 反動的陣営のアメリカ、イギリスとフランス、三つの国の総人口は2億3千万人である。平和的民主的陣営に比べて、人口はどれくらい少ないだろうか。
3. 米国の空軍は、6月28日から7月4日まで7日間かけて平壤を空襲し、朝鮮人民303人を殺害した。平均1日にどれくらいの人を殺害したのか。』<sup>23</sup>

こうした数学問題は別の科目での時事教育とあわせて、アメリカが侵略者であるというメッセージを絨毯爆撃のように生徒に仕掛けている。同時にこうした教育実践は閉鎖的言論空間を構成する。そこに取り囲まれた生徒は、多様な情報をもとに主体性を発揮しながら物事を考える可能性を奪われて、教師の言うことをそのまま受け入れていくことが容易に想像できる。

## (2) 二つの歪んだ国家像—墮落した米国と立派な中国

自国への誇りと愛国心を培うこととアメリカを猛烈に非難すること、この二つの課題を同時に抱える愛国主義教育は、墮落したアメリカと立派な中国という二つの対照的国家像を展開している。

墮落したアメリカに関しては、アメリカ人民がいかに惨めな生活を送っているというイメージで紹介されることが多い。ある小学校教師は国語の授業で、ソビエトとアメリカの民衆の生活水準について、第二次世界大戦後にソビエトは物価を4回も下げ、民衆の生活レベルを高めてきたのに対し、アメリカの方は物価が右肩上がりに増加し続けたとの図式を展開している<sup>24</sup>。ここで教師らは、物価が上がることはイコール生活水準の低下という認識で市場経済体制をとるアメリカを理解している。

類似の場面は、中学校の化学授業にも現れている。上海の化学教師である鄭建安は、自然科学としての化学にも階級性があり、化学を教えるときに思想性をも強化すべきだと主張した。そのような前提に立って、鄭は当時上海で広く使われていたアメリカ中学校の化学教科書から切り込んでアメリカ批判を展開した。鄭はまず、同教科書は資本主義的生活様式を基準として作られており、アメリカの生活様式を顕揚するものだと一蹴している。その理由として鄭は、教科書の中に掲載されていたジャムの作り方を取り上げて、「生徒たちが西洋人のジャムの作り方を知ったとしても、一般的人民大衆の栄養レベルを向上さ

23 任杏発「怎樣在小学各科教学中貫徹愛国主義教育（日本語訳：いかに小学校の各科目教育を通じて愛国主義教育を実践するか）」教育資料叢刊社編、前掲書、p.79。（転載元『済南教師』第5号、第6号合併号、1951年1月）

24 帥清「怎樣在小学語文教学中貫徹愛国主義教育（日本語訳：いかに小学校の国語教育を通じて愛国主義教育を貫徹するか）」教育資料叢刊社編、前掲書、p.87（転載元『天津教育』初等教育版第1巻第1期、1951年9月）

せることにはならない。この本の性質は結局アメリカの生徒に俗っぽい功利主義と狭苦しい民族主義を養成し、米国帝国主義の侵略政策に適応させるための代物だ」と激しく非難する。また、中国における鉛と硫酸の生産量が少ないことについて、それは西洋列強と国内買弁の圧迫のためだと主張している<sup>25</sup>。

鄭建安は生徒たちにソビエト資料展やソビエト科学映画上映会の見学を勧め、ソビエトが中国に与えた援助を宣伝する際、「米国帝国主義の文化はファシズムとエロチシズム、腐敗と滅亡の道をたどっている」と宣言している<sup>26</sup>。

以上の事例は、当時の教室にてそれほど珍しい講義内容ではなかったと思われる。というのは、これらの事例が教育雑誌に掲載されたこと自体、ほかの教員に広く紹介する価値がそこに認められていたことを意味する。実際、掲載されることによって、模範事例として学ばれていたと考えられる。

真実とかけ離れたイメージでアメリカ社会を捉える傾向は、教師個人の講義だけでなく、全国の教育を指導する権威的な『人民教育』にもよく見られた。同誌に掲載された「アメリカ中学校教育の反科学性と反動性」という一文は、「アメリカ政府は70%の予算を軍事用途に与える。アメリカ国民の教育経費は可哀想なほど少ない」とのアメリカ批判を展開している<sup>27</sup>。ところが事実上、第二次世界大戦の間でさえ、アメリカの軍事支出は最大でも全国GDPの40%を超えていなかったのである<sup>28</sup>。こうした記述は、単なる事実誤認という可能性もなくはないが、その根底にあるのはアメリカのイメージ低下を狙う意図である。

また、国際主義を提唱するために、1920年代以来、ソ連が中国共産党に与えてきた援助がたびたび愛国主義教育で取り上げられているが、一方、第二次世界大戦中のアメリカが行った中国支援はまったく言及されないままであった。

墮落したアメリカ像と対照的になっているのは、立派な中国像である。これは、悠久の歴史と優れた文化をもつ立派な中国像の提示を通じて、生徒の国への誇りを涵養することに繋がる。これを貫徹させるために、古代中国が数学において達成した成果が、生徒の自国への誇りを育てる材料として活用される場面があった<sup>29</sup>。

しかし、自国の偉大さを強調するあまり、狭苦しい民族主義を起こしてしまうのも事実

25 鄭建安「在化学教学中貫徹愛国主義教育的經驗（日本語訳：化学教育を通じて愛国主義教育を実践する経験）」教育資料叢刊社編、前掲書、pp.51～53。（転載元『新教育』（上海）第3巻第3号、1951年5月）

26 鄭建安、前掲文、p.56。

27 「美国中学教育的反科学性与反動性（日本語訳：アメリカ中学校教育の反科学性と反動性）」『人民教育』1951年第1期。

28 Our world data サイト。 <https://ourworldindata.org/grapher/military-expenditure-as-a-share-of-gdp?time=1930.1945&country=USA~DEU> 2021年11月1日閲覧。

29 余元慶、余元希、前掲文、p.49。

である。この問題を歴史学者である烏廷玉はいち早く察知した。烏廷玉は愛国主義教育に現れた行き過ぎについて、次のような事例を紹介している。「食事する時に、中国人は箸を使い、西洋人はフォークとナイフを使う。それは中国人の手は西洋人の手より器用だということの証明だ。社会発展史の観点から見れば、手は労働の産物であり、手がより器用だということはすなわち中国人は西洋人より進んでいることの証明だ」という説がそれである<sup>30</sup>。教師が歴史を教えるときに強引に現実問題と結びつける例として、「ある教師は清末の劉永福の黒旗軍を説明するとき、無理をしてまで朝鮮問題に言及し愛国主義教育をしようとする」点も挙げられる、そのような現象に対して、烏は「もしこんな調子で愛国主義教育をやれば、あるべき効果を出すのは無理だろう」と指摘する<sup>31</sup>。

烏廷玉はそのような事態の原因について、一部の教師が愛国主義教育を政治的任務として捉え、無理に材料を作り上げたからだと分析している<sup>32</sup>。歴史学者としての烏廷玉の洞察はなかなか深い。こうした文章が1952年1月に発表されたことを鑑みると、烏が指摘した現象は、1950年末から1951年末にかけて多発していたことが推測される。

自国の偉大性をひたすらに強調することは、文系科目に限らず、理科科目にもよく見られた。このような現象については、中央教育部副部長兼高等教育司長を務め、化学家であり、教育家である曾昭抡の論述からその一端を伺うことができる。「注意すべき偏向は二種類ある。一つは自慢自大であり、中国はもう十分に素晴らしい、もう努力しなくても良いという偏向である。我々は今でも多くの国に学ばなければならない。(中略)。もう一つの偏向は自分たちの成果を誇張しすぎて、科学的根拠のない間違えた言説まですることである。例えば黄帝が指南車を発明したような言い方には歴史的根拠がない。墨子が飛行機を発明したという説も信憑性のない誇張である」<sup>33</sup>。

当時は、現場の教師が力を入れすぎて、偏った愛国主義教育を行う現象が多く現れた。この傾向に気づいた専門家らは問題を指摘し、状況の是正を図ろうとした。しかし、それほど時間が経たないうちに、多くの専門家が中国共産党のプロパガンダ宣伝に加わった流れを見ると、こうした専門家らの努力は功を奏しなかったことが分かる<sup>34</sup>。

30 烏廷玉「目前歴史教学中愛国主義教育存在的問題及改進意見（日本語訳：目下歴史教育における愛国主義教育に存在する問題及びその改善意見）歴史教学編集委員会編集『歴史教学与愛国主義思想教育（日本語訳：歴史教学と愛国主義思想教育）』光明日報社、1952年1月、p.37。

31 烏廷玉、前掲文、p.39。

32 烏廷玉、前掲文、p.40。

33 曾昭抡「自然科学教学与愛国主義教育（日本語訳：自然科学教育と愛国主義教育）」河南文教庁編審課編集『愛国主義教育』文教出版社（河南）、1951年4月、p.118。

34 1952年下半年以降、中国共産党の「ソビエト一辺倒」の政策宣伝に助力するために、著名な科学者がソビエトの科学技術を褒め称えるとともに、かつての留学先であった欧米各国の科学技術を否定する論調を展開することが多く見られるようになった。鄭成「建国初期の科学研究者によるイデオロギー宣伝協力についての一考察—」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』第30号、2018年2月。

### (3) アメリカを恨む感情の涵養

この時期の愛国主義教育において、生徒たちの中にアメリカに対する強い憎しみを培うことも目的の一つとなっていた。早くも1950年10月に、抗米援朝をめぐる政治教育の方針について、『人民教育』が「抗米援朝のための政治教育を展開させよう」と題した社説を発表し、「アメリカに対する軽蔑と最高の憎しみを促すべきだ」と唱えている<sup>35</sup>。

この指示を受けて、教育学者の董存才は翌年の1月、『人民教育』に「最近の時事教育の経験」という文章を発表し、一部の生徒の間に存在しているアメリカへの親近感や崇拜感、及び恐怖感を取り除かなければならないと主張した。董存才は「生徒たちに具体的な事実を伝えるだけでなく、理論的知識も伝授し、彼らのアメリカに対する認識を高め、米帝に対する軽蔑と敵視を深め、米帝とは絶対に共存できないような憎しみを培うべきだ」と力説する<sup>36</sup>。

董存才が唱えているように、アメリカの侵略性を強調し、生徒たちの対米敵視の涵養に力を入れる教師は多数いた。例えば、ある教師は中国東北の広大な土地と豊かな物産を称えた後、話の先を一転させて、その土地が現在アメリカに侵略されていると主張した。この教師は生徒たちに呼びかけた。「東北には豊かな物産と便利な交通網がある。泥棒米国に奪われてたまるものか?!」生徒たちは答えた。「クソ泥棒に奪わせない!」生徒全員の怒りを確認した教師は続けてこんな話をした。「泥棒米国は東北を侵略する野心を抱いているどころか、すでに我が祖国の東北の辺境を爆撃し始めた。多くの労働者と農民は負傷し、または命を失った。臨江では夏休みの間に家の生産を手伝う一人の子供も爆撃によって命を奪われた。米国帝国主義の侵略行動はどんなに恨めしいことか!」この教師自身の観察によると、この時のクラスはまるで「活報劇」(時事ネタ演劇)の場となったように、生徒たち全員の表情は教師の表情につられてつねに変わり続けていたようである。教師は呼びかけを続ける。「皆さん、もし東北を守り、米帝の飛行機に爆撃されて死んだ同胞の仇を打ち、隣国の人民を救いたいのであれば、我々はどうすべきか?」生徒たちは口を揃えて答えた。「朝鮮を援助しよう!米帝を消滅しよう!米帝を打倒しよう!」<sup>37</sup>

この教師の叙述から、米軍の残虐性を宣伝することによって生徒の反米感情を煽り上げる手法はかなり成功していたことが窺える。

35 『人民教育』第2巻第1期、1950年10月、p.9.

36 董純才「最近開展時事教育的幾点經驗(日本語訳:最近の時事教育の経験)、『人民教育』第2巻第3期、1951年1月、p.14.

37 哲民「我怎樣在東北地理時貫徹愛国主義的思想教育(日本語訳:私が東北地理を教える時、愛国主義的思想教育をいかに実践したのか)、『愛国主義教育的教學經驗(日本語訳:愛国主義教育の教育經驗)』学習書店、1951年4月、p.52.

一方、朝鮮戦争が北朝鮮によって始められた事実や、それが朝鮮半島にもたらした無数の人間惨劇などのもう一面の真実が、こうした愛国主義教育で触れられることはなかった<sup>38</sup>。限定されかつ歪曲された情報に基づいて、若い生徒たちはアメリカは侵略する側で、侵略される中国は正義の味方だという基本認識を共有した。こうして事実と真相の隠蔽は、生徒が政府の主張を受け入れる土台となっていったのである。

その間、多くの教員は戦地報道が生徒の対米敵視を強化させる上で有効であることに気づいた。上海で刊行された雑誌『新教育』掲載の「いかに時事教材を利用して愛国主義教育を行うか」という一文で、作者の葉夫は魏巍のルポルタージュ作品『誰是最可愛的人（日本語訳：最も愛すべき人は誰だ）』を同業の教師たちに向かって強く推薦する際、下記の箇所を引用している。

「烈士たちの死体はありとあらゆる姿勢をしていた。敵の腰を押さえ込んでいる者、敵の頭を押さえ込んでいる者、敵の首を締め付けている者、敵を地面に押さえつけた者、敵とともに倒れ、一緒に焼かれてしまった者。ある戦士は手榴弾を握ったまま死んでいる。手榴弾は脳髄に塗れていたが、彼のそばに死んでいた米国兵は頭が砕け、脳髄が地面に溢れ出していた。もう一人の戦士は、口の中に敵の耳を噛みちぎったまま死んでいた。烈士たちの死体を埋葬するとき、彼らの両手はしっかり敵を抱えていて、なかなか離せないため、手の指が折れることさえあった」<sup>39</sup>。

葉夫はまた次の英雄譚を紹介している。「楊宇山の労働党員は敵に捕まった。さまざまな刑罰を加えられた後、皮を剥かれて、肉をナイフで一個一個小さな塊に刻みつけられて、街の家々の引き出しの中に入れられた。だがこの事件のあとその街から六千人余りの若者が軍隊に加入した」<sup>40</sup>。

葉夫が以上の内容を引用した理由は、生徒の情緒的反応を喚起させるにはこうした衝撃的な描写がもっとも効果的であることを心得ていたからであろう。葉夫によれば、中国人民大学教学研究室の教師たちは『最も愛すべき人は誰だ』を読んだ後、自発的に追悼会を行い、会場に烈士たちの名前と弔辞をかけたという<sup>41</sup>。

今日的観点から見れば、このような血生臭い描写をまだ子供である生徒の読み物にすることは考慮に欠けている。現実生活の中で、このような残酷な戦闘場面を経験したことの

38 当時の中国では、朝鮮戦争の勃発原因を把握するのは中共指導部に限定されたと思われる。ほとんどの国民は中共のプロパガンダを信じて、それはアメリカが発動した戦争と信じていた。未だにこのような認識を持つ中国人が大勢いる。

39 葉夫「怎樣利用時事教材進行愛国主義教育（日本語訳：いかに時事教材を利用して愛国主義教育を行うのか）」教育資料叢刊社編、前掲書、p.37。（転載元『新教育』第三卷第五期、1951年7月）

40 葉夫、前掲文、p.39。

41 葉夫、前掲文、p.40。

ある人は、PTSDに悩まされやすいようだ。しかし葉夫の文章を読む限り、このような認識は共有されなかったようである。むしろ、当時の教師の間には、教材に残酷さが増すほど生徒の米国敵視の感情が喚起されやすいという感覚が一般的だったのではないかと推測される。

生徒たちにアメリカへの強い憎しみを覚えてもらうように、「授業の時、教師は声調と表情の中に愛憎の感情をしっかりと込めて、生徒の精神を感化すべきだ」と総括する教師もいた<sup>42</sup>。このように、生徒をいかに感化させるかという点を優先する教師には、生徒が自分で考えるように配慮する余裕はなかつただろう。「ごく僅かな家庭成分の不良な生徒はまだやや無関心な態度を取っているが、全クラス五組は次のように一致した結論を出した：皆ある程度対米敵視の思想を形成し、米帝は最後まで我々の敵だということをはっきり認識できるようになった」という同教師のまとめによると、こうした教育法はかなりの効果を取めたようである<sup>43</sup>。

低学年の生徒の場合、歌謡曲を通じてアメリカを恨む感情を植え付けようとする教育法が応用されていた。「米帝は気狂いだ。米帝は恨めしや。朝鮮を侵攻し、我が中国を挑発。抗米援朝、衛國守家。これらの野心狼を、徹底的に消滅しよう」などの歌謡曲がある<sup>44</sup>。歌詞の意味は生徒たちがどこまで理解できたか定かではないが、繰り返し歌う中で、米国は恐い存在だという感覚が子供たちの意識に浸透したことは想像に難くない。

米帝の凶暴さを強調する教育法は効果的ではあったが、子供たちに心理的な不調ないしは悪影響をもたらす一面もあった。多くの子供がそういう話を聞いたあと、いっそうアメリカを恐れるようになったという話もよく聞かれる。そのため、次のような注意喚起を行う教師も現れた。「ある教師は、米帝が朝鮮でいかに凶暴を極め、やたら人を殺すのかを話していた。本来の目的は子供たちに敵を憎悪するよう啓発することであったが、あまりにも怖い話し方をしたので、逆の効果となってしまった。まるで敵のために宣伝したように、子供にアメリカを恐れる感情を起こさせた」<sup>45</sup>。

愛国主義教育という名の下で、このような教育法が幅広く応用されていた。「学校で開催される一部の告発会では、敵の凶暴な殺人行為をあまりにも誇張したきらいがある。芝居の中で米帝に虐殺された死体を演じるとか、陰気で恐ろしい会場作りをするなどの事例

42 施樹森「教「粉碎敵人的汚蔑、欺騙和恐喝」一文的經驗（日本語訳：「敵の誹謗中傷、欺瞞と恐喝」という文章を教えるにあたって）」、教育資料叢刊社編、前掲書、p.44。（転載元『蘇南文教月刊』第二卷第二期、1951年2月）

43 施樹森、前掲文、p.43.

44 張弢「小学里怎樣進行時事教育（日本語訳：小学校で時事教育をいかに行うか）」河南文教庁編審課編集、前掲書、p.101.

45 帥清、前掲文、p.92.

もあった」<sup>46</sup>。このような教育手法は、それ以降の政治宣伝にも一般的に見られるようになる。

#### (4) トレーニングとしての愛国主義教育

学校で展開された愛国主義教育の中には特別な形式を取ったものがある。一部の教師がゲームの形を利用して、機械的トレーニングの手法で生徒を繰り返し刺激し、教育の目的を達成しようとしたのがそれである。

上海では、教師たちは射撃ゲームを通じて反米教育を展開した。「教師たちはまず美術の授業で米帝を象徴する張り子の虎をいくつか作っておいた。それから地面に鴨緑江や38度線、米帝占領下の朝鮮都市などを描いた上、地名を書いた札と張り子の虎を置き、子供たちを朝鮮人民軍、中国人民志願軍、中朝人民前線支援部隊などに編成し、さらに各隊の中から隊長連絡員や扇動員などを選び出した。ゲームのやり方は、ボールを使って目標地においた紙の虎っ子を「射撃」し、もしボールが命中して虎っ子が倒れたら、その都市を「解放」したと宣告し、さらにつぎの目標へと行進する。行進中に隊長によって目標が定められ、集中的に「射撃」するのである」<sup>47</sup>。

「戦犯逮捕」、「戦犯処刑」というゲームもある。「戦犯逮捕」とは木や紙などで作られた小さな人形に、トルーマンやマッカーサー、蒋介石、李承晩などの名前を貼り付けて、子供たちに藤で作った輪を人形に投げかけさせるゲームである。担当の教師は、このゲームを「子供の数に関する観念を深めながら、戦争犯罪者に対する憎しみを深めさせた」と評価している<sup>48</sup>。

「戦犯処刑」というのは空気銃または弾弓を使って、戦犯人形を射撃するゲームである。このゲームを授業に導入した教師はつぎのように紹介した。

「このゲームを通じて、子供たちは米帝に対する憎しみと祖国に対する熱烈な愛情を養成することができる」。またゲームの具体的な場面も以下のように紹介していた。「ある四年生がトルーマンに命中したあと、教師の服を掴んで「トルーマンの目に当たった。いまも血を流している」と興奮した様子で言った。これは子供の想像である。教師は「あなたはなぜ彼を撃ったの」と聞いたら、「こいつは米帝、大悪党、

46 劉祖榮「対児童進行時事教育的体験（日本語訳：児童の時事教育の経験）」『愛国主義教育』文教出版社（河南），1951年4月，p.107。（転載元『天津教育』1950年第7号。）

47 何平，喬旺「怎樣通過体育活動進行愛国主義教育（日本語訳：いかに体育活動を通じて愛国主義教育を実践するか）」，教育資料叢刊社編，前掲書，p.102。（転載元『新教育』（上海）第二卷第五期，第三卷第一期，1951年1月，3月）

48 何平，喬旺，前掲文，p.103.

大強盗だから」との回答が返された。教師はさらに聞いた、「彼はどんな悪事をやったの」。子供は力強く答えた。「こいつは朝鮮人民を殺害し、台湾を侵略した」<sup>49</sup>。

このようなゲームは、機械的にトレーニングを行うという要素が強い。つまり、条件反射を利用して子供を訓練するのである。「米国軍隊が朝鮮人民を殺害している」、との意味は、低学年の小学生にとって現実として理解しがたい内容である。しかしアメリカが悪いことをしたという概念は、楽しいゲームの形に託されて、機械的な繰り返しを通じてすんなりと子供たちのなかに入ってしまったのである。

映画の鑑賞もトレーニングの一部である。映画鑑賞が終わった後、教師と子供の間に関心するような会話が行われた。

教師：「祖国のない子供たちはどうなっているか。」

子供：「圧迫されて、食べ物も服もなく、お母さんにも会えないし、指導者のスターリンさんにも会えない。」

教師：「誰が彼らを圧迫しているか。」

子供：「米帝国主義。」

教師：「誰が彼らを救い出すでしょう？」

子供：「お母さん、ソビエトの軍官、祖国、スターリン。」<sup>50</sup>

このような会話も機械的トレーニングの一種と言えよう。このトレーニングは、ゲームではなく、会話を通じて行っているのである。一連のやりとりから、生徒はこのようなやりとりに慣れ、どんな応えを期待されているのかがよく分かっている模様である。愛国主義教育の成果とも言える。

## (5) 同調の圧力

愛国主義教育においては、教師の言うことを、生徒が従順に受け入れるという、同調の圧力が応用されているケースが多く見られる。権威を持つ教師に対して、生徒が異議を唱えにくいという関係性が教師と生徒の間には存在していた。このような関係性が、愛国主義教育の場で生かされていた。

反革命鎮圧運動中に起きた次のような出来事がこの点を説明している。あるクラスが街の西郊に砂を運びに行く途中、処刑場に連れて行かれる十数名の犯人の列と遭遇した。十数名がこれからされることにむごさを感じた生徒は、引率の教師になぜこれらの犯人を教

49 何平, 喬旺, 前掲文, p.103.

50 呂敬先「怎樣向低年級生徒進行愛国主義教育（日本語訳：低年層の生徒たちへの愛国主義教育をいかに実践するか）教育資料叢刊社編, 前掲書, p.106.（転載元『人民教育』第二卷第五期, 1951年3月）

育して、更生してもらわないのかと聞いた。生徒の中には父や兄が逮捕または処刑された人もいて、彼らはいっそう納得がいかないようだった。引率の教師は、農夫と毒蛇の寓話を引用し、敵に対しては断固鎮圧すべきだと説明するとともに、レーニンの「敵に対する優しさは自分に対する残酷さだ」という言葉を使い、「古いヒューマニズムでは敵と味方、良しと悪しを区分できない」と力説した。教師はさらに大学時代の同級生のことを生徒たちに紹介した。その同級生は自分の父親が悪党地主として処刑されたとき、「階級の観点から見れば、彼は私の敵となり、罰を受けるのは当然だ」と言ったそうだ。この教師によれば、それ以降、家族に逮捕者がいる個別の生徒以外、ほとんどの生徒は勉強に専念するようになり、上記の問題に疑問や不平を抱いたりするようなことはなくなったという<sup>51</sup>。

教師は、この一件はこれで落ち着いたと認識したようである。確かに生徒たちは疑問や異議を挙げなくなったかもしれないが、それを承服とみるのはやや早計である。生徒たちの無言は、教師に抑えられた要素が大きい。

なぜなら、生徒たちが疑問を挙げた時、教師は犯人たちがどんな罪を犯し、なぜ処刑されるのかについて説明しなかった。ただ「政府が良い人を誤って逮捕または処刑することが絶対ない。全ての判決は詳しい調査に基づいて下されたのだ」と強調していただけである。周知のように、1950年代初めの反革命鎮圧運動では70万人が処刑され、120万人が逮捕され、数多くの冤罪事件が起きた。当局による容疑者扱いのずさんさは、何も書かず、ただ「悪い奴」と一言綴っただけの容疑者調書があったことから伺える<sup>52</sup>。身内や友人の身内が厳しい現実を経験した生徒なら、教師の答えに簡単に納得するはずがない。

生徒がそれ以上疑問を出さなかった理由は、教師の権威だけではない。当時の社会全体に浸透していた政治的圧力も大きい。共産党政権の大量殺戮に疑問を感じても、内心の疑問と不平を漏らしてはいけないと人々は心得ていた<sup>53</sup>。実の父親が処刑されても、当事者が「罰を受けるのは当たり前だ」と公言せざるを得ないところから、同調の圧力の強さが伺える。

51 李運乾「在政治教学中貫徹愛国主義教育的經驗（日本語訳：政治教育を通じて愛国主義教育を実践する経験）」教育資料叢刊社編、前掲書、pp.70～71。（転載元『文教通信』第2巻第4号、1951年5月）

52 楊奎松『中華人民共和國建国史研究』江西人民出版社、2009年、p.209。

53 筆者が以前の論考で考察した、1950年代初頭頃の上海に居住した大学生にも同じ心境が見られる。1950年10月より、中共政権は反革命鎮圧運動を起こし、国民党の残留勢力の摘発に乗り出した。上海市政府の場合、初期対応は該当する人間が出頭すれば深くは追究しないという比較的緩やかなものであった。しかし後に毛沢東の指示を受け、反革命鎮圧が急進化しはじめ、逮捕された人数が急増した。このような状況を見て、大学生は当局のやり方に対して、不信感を抱き始めたが、その気持ちはあくまでも日記への吐露に止まるだけであった。鄭成「中ソ友好交流をめぐる中国青年知識人のプロパガンダ受容について：青年Sの日記を手がかりに」『アジア太平洋討究』36号、2019年3月。

このような同調の圧力が、愛国主義教育に大きく寄与している。それは、生徒が教師の期待に応じて積極的に行動することにも現れている。前文で紹介したように、教師が生徒たちに米国は「どんな悪事をやったか」と聞いたとき、子供が「朝鮮人民を殺害し、我が台湾を侵略した」と即答したのはその一例である。また、教師の意図を理解した高学年の生徒が、自ら材料を作成してアメリカを批判することもある。こうした事例は教師によって愛国主義教育の成功例として同業者の間に広く宣伝されるとともに、良き見本として生徒にも推薦された。筆者がかつて考察した1956年の愛国主義教育サマーキャンプにも類似の状況が存在していた<sup>54</sup>。

人間には、周囲に認めてもらいたいという心理的欲求がある。子供も例外ではない。そこに上記のような教師の期待に懸命に応えようとするのが現れたのである。筆者自身の体験談であるが、1980年代初め頃、中国政府が「雷鋒に学ぼう」運動を強く推し進めた。筆者を含める多くの子供たちは親からもらった小銭を学校に持ってきて、道端から拾ったと称して教師に届けた。子供たちは、拾得物を警察に届けた子が先生に褒められたのを見て、同じ行動をとれば自分も先生に褒められるだろうとそう行動したのである<sup>55</sup>。1950年代初期も同じ状況にあったろう。当時の教師は生徒の心理をよく把握し、愛国主義教育の実施においてそれを有効に活用していた。その結果、教師の期待に対して学生がポジティブに反応するという仕組みが形成されたのである。

同調の圧力は教師と生徒との間に限ったものではない。それは当時、普遍的に存在していた現象であった。同調の圧力のもと、多くの若者は皆の前で積極性をアピールしたが。当時、入隊を積極的に申し込む若者、また軍事学校の入学試験を受験する若者が多数現れたがそれを示している。その他、時事教育の後すぐに聴講者たちに各自の立場を表明させることもあった。共青团中央宣伝部副部長の許立群の話借りれば、「群衆に宣伝内容に対する賛成と擁護をすぐにでも表明させるように迫る」のである<sup>56</sup>。許立群の批判から、そのような現象がかなりの数存在していたことが伺える。愛国主義教育の本質は、人々に同じ理念を持たせ、同じことを考えさせることである。同調の圧力はその意味で、愛国主義教育を支えた不可欠な要因であったと言えよう。

54 1956年の夏令营に次のような事例がある。8月1日、強い風雨のなか、二人の子どもが広場に走り出して、夏令营の旗の撤収を強行した。教師はこれを「共産主義的思想を身につけた」現れとして大いにアピールした。鄭成「中国の愛国主義教育の有効性への歴史的考察—1956年の上海鉄道局主催の夏令营を手がかりに—」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』37号、2019年11月、pp.175~176。

55 筆者の記憶では、当時のクラス担任の先生は最初、生徒たちが相次いで拾得物を提出してくることを喜んでしたが、やがてたくさんの薄汚れたコインの保管に悩み始めていた。

56 許立群「時事宣伝的思想性と愛国主義的实践（日本語訳：時事宣伝の思想性と愛国主義的实践）」河南文教育編審課編集、前掲書、p.43。

## まとめ

本論文は、中華人民共和国建国初期の小中学校を中心に愛国主義教育の実施状況を考察した。朝鮮戦争を機に、愛国主義教育は急速に展開されるようになった。当初、愛国主義教育は大規模な群衆運動という形でしばらく続いたあと、当局の指示下で学校の日常教育の一部として、各科目の授業実施と融合する形で展開されるようになった。

朝鮮戦争を機に発足されたがゆえ、愛国主義教育は精神的戦争動員という性格を帯びる。祖国愛を唱える教育は通常、二つの側面がある。一つは自国の歴史、自然、伝統文化などへの愛着を涵養することである。もう一つは現政権の偉大性を唱え、国民の忠誠心と支持を調達することである。朝鮮戦争後の愛国主義教育は、二番目の側面に重きを置いていた。

本論文の考察を通じて、朝鮮戦争の愛国主義教育が大きな成功を収めたことについて、二つの理由があることが分かった。一つは、悠久の歴史、伝統文化と屈辱な近代を中心とした歴史的資源が、国との一体感と誇りを喚起させる材料として大いに活用されたことである。もう一つは、一連の手法が使われ、まるでトレーニングを行うように愛国主義の理念を生徒の心底に植え付けていたことが挙げられる。具体的には、生徒たちがアメリカを恨むように事実関係を歪曲、隠蔽したり、過激な戦闘場面をもって子供の感情に訴えたりするなどの多様な手法が応用された。年齢が低い子供の場合、ゲームが取り入れられ、機械的訓練を通じてアメリカを恨む感情がインプットされる。また、愛国主義教育の現場に同調の圧力が存在し、当局のやり方に疑義を呈することは許されない。このような愛国主義教育が学校の正規教育と融合しながら全面的に実施されると、生徒は情報の籠に閉じ込められ、偏った情報にしか接しない。生徒の主体性が疎かにされ、独立思考の可能性が奪われた分、愛国主義教育が唱えるものをすんなりと受け入れるようになる。このような教育手法は成功経験として教育専門誌、新聞記事、会議などを通じて、一層普及された。その間、多くの教員がこうした経験を学び、自らの教育実践で応用することが時代の流れとなった。その意味で当時の愛国主義教育は、生徒だけを対象としたわけではなく、国民を広く巻き込んだものだったと考えてよい。

建国初期の愛国主義教育は民意の動員において成功したものの、それに動員された国民の愛国主義感情は強い排他性をもつものであった。ただし、これは為政者を悩ませる問題にならなかった。為政者の立場から見れば、国民を束ねることにおいて、愛国主義教育に勝るツールは簡単に見つかるようなものではない。日本批判を含む中国の外国批判に排他的な傾向が見られるのは、今日でも建国初期の愛国主義教育の形跡をとところどころ見受け

られるためであろう。

(本研究は基盤研究 C 17K03149, 三菱財団法人人文科学研究助成「中国建国初期の小・中学校教育におけるソ連宣伝の形成とその受容」の助成を受けたものである。記して謝意を表す。)

#### 参考文献：

##### 日本語

- 木下恵二「中国の愛国主義教育」家近亮子・松田康博・段瑞聡編著『岐路に立つ日中関係—過去との対話・未来への模索』晃洋書房, 2007年, pp.109-130.
- 江藤名保子『中国ナショナリズムの中の日本—「愛国主義」の変容と歴史認識問題』勁草書房, 2014年.
- 王雪萍「中国の歴史教育における愛国主義教育の変遷—建国後の「教学大綱」の変化を中心に—」『現代中国研究』第29号, 2011年.
- 汪錚『中国の歴史認識はどう作られたのか』東洋経済新報社, 2014年.
- 錢理群著, 阿部幹雄ほか訳『毛沢東と中国—ある知識人による中華人民共和国史』青土社, 2012年.
- 鄭成「中国の愛国主義教育の有効性への歴史的考察—1956年の上海鉄道局主催の夏令營を手がかりに—」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』37号, 2019年11月, pp.165-179.
- 鄭成「中ソ友好交流をめぐる中国青年知識人のプロパガンダ受容について—青年Sの日記を手がかりに—」『アジア太平洋討究』36号, 2019年3月, pp.91-108.
- 鄭成「建国初期の科学研究者によるイデオロギー—宣伝協力についての一考察—」早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』第30号, 2018年2月, pp.227-237.

##### 中国語

- 『人民教育』1950年, 1951年各号.
- 『天津教育』1950年, 1951年各号.
- 『新教育』1950年, 1951年各号.
- 教育資料叢刊社編『学校中的愛国主義教育(日本語訳:学校のなかの愛国主義教育)』改訂版, 人民教育出版社, 1952年12月.
- 西北軍政委員会教育部編『怎樣實施愛国主義教育(日本語訳:いかに愛国主義教育を実施するか)』西北人民出版社, 1951年4月.
- 河南文教庁編審課編集『愛国主義教育』文教出版社(河南), 1951年4月.
- 歴史教学編集委員会編集『歴史教学与愛国主義思想教育(日本語訳:歴史教学と愛国主義思想教育)』光明日報社, 1952年1月.
- 呉鋒ほか訳著『愛国主義教育的教學經驗(日本語訳:愛国主義教育の教育經驗)』学習書店, 1951年4月.
- 中共中央文献研究室編『建国以来重要文献選編1』中央文献出版社, 2011年.